



TITLE:

静脩 Vol. 15 No. 3 (1978.8) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 15 No. 3 (1978.8) [全文]. 静脩 1978, 15(3)

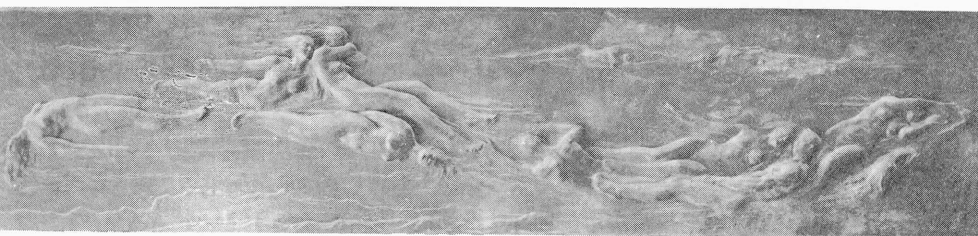
ISSUE DATE:

1978-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65963>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1978年 8 月

Vol. 15, No.3

学生用図書の選定について

学生用図書附属図書館選書委員会 矢 島 治 明
前 主 査 (薬学部教授)

昭和51年度より京都大学附属図書館に文部省より学生用図書購入費が配当されるようになり、このため附属図書館では館長のもとに中央選書委員会（部局長以外の各部局より選出された商議員で構成）が設置され、その規定にもとづき、予算執行のための配分額が決定されます。

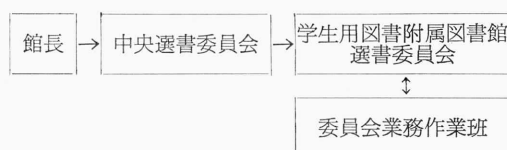
この規定が正式に決定されたのは昭和52年4月ですが、実質的な活動は予算の配当された昭和51年度より行われ、中央選書委員長には、当初、人文科学研究所河野健三教授、その後、経済学部木原正雄教授が選出され、現在は理学部楠幸男教授であります。学生用図書購入費の予算配当額は約4千万円であり、51年度にならい52年度の実行予算も以下の様に決定されました。

- 1) 学生用図書部局選定額（第一次）10,000千円
- 2) 学生用図書部局選定額（第二次）8,800 "
- 3) 洋参考図書費 2,200 "
- 4) 継続図書 1,674 "
- 5) 学生用図書（中央館選定分） 10,000 "
- 6) 学生用図書（高額分） 10,000 "

このうち1)は各部局に選定を依頼し、それぞれの図書室におかれます。各学問分野に細分されるわけです。2)も各部局に選定を依頼するものですが、附属図書館にそなえられる関係上、比較的共通利用度の高いものが考慮されています。3)と4)

は附属図書館に備えるべき洋参考書、継続分に充当されます。

学生用図書附属図書館選書委員会は、この5)6)に関する予算の執行を決定する委員会であって、上記の中央選書委員のうちから、各学問分野を担当する様に選ばれた委員（5名）で構成され、委員会要項、および業務要領（昭和52年4月、館長裁定）にもとづき、附属図書館事務部の作業班の援助を得て活動しています。この機構を図示すれば以下のようになります。



本委員会の当初の主査は上田医学部教授でありましたが、御病気のため木原経済学部教授が後任となりました。本委員会がどのような方針で学生用図書を選定して来たかを御報告します。

1. 学生用図書の選定について

各部局の図書室は年度はじめに立てた予算で運営されますので、毎月出版される新しい図書の購入に対応出来ません。しかも前述した各部局に選定を依頼する一次、二次分は主として研究レベルの大学院学生を主体とする図書にかたよって来ます。こうした時機と内容を考慮し、本委員会は毎

月一回開催され、各月に出版される図書（東販「新刊図書目録」）のうち、主として教養的なもの、学部学生諸君の勉学に必要なと判断される図書の購入を決定しています。

選定される図書は、特に境界領域をみおとすことなく、各分野を網羅し、また利用度の高いものでなければなりません。すなわち各分野別の選定比が、利用比とほぼ平行した状態が望ましいと考えられます。まず各分野別の利用状況を示したのが表1であります。この分類は上記の出版目録によるもので、各学部学生の利用比と直ちに对应しません。そこで各学部別利用比を調べますと表2の様になります。冊数にして約57,000冊、33,400人(昭和51年度)が利用し、部局の立地条件、学生数に左右されて直ちに判断を下すことは困難ですが、全学の学生諸君がすべて図書館を利用してい

ることになります。傾向として教養部、法学部、工学部の学生の利用比が高く、南部地区の医・薬学部学生の利用比の低いことが目立ちます。

これに対して51年、52年度に出版目録を参考にして選定された図書の分野別比を表1に示しました。予算面からは冊数のみでなく金額も問題になります。この2つの条件を加味しますと、ほぼ利用比にみあった図書が購入されたこととなります。ただ自然科学部門の利用比に対して選定購入比が低いのが目立ちます。これはこの分野の出版比が、自然科学8.74%、工学9.92%と全体に比して低いこと、また理科系の書物は利用期間が短いので、なるべく利用期間の長いものを考慮に入れざるを得ないことの理由によります。しかし購入された以上、非常に利用率が高いことは喜ばしいことと判断されます。従って出版比を選書の基

表1 京都大学蔵書構成比・利用比

区 分 分 類 別		蔵書構成比(49年)			利 用 比 %			51年度選書比		52年度選書比	
		全 学	図 書 館		49 年	50 年	51 年	冊数%	金額%	冊数%	金額%
			庫 内	開 架							
和 書 (内は N D C)	I 宗教・哲学(1)	9.1%	%	%	4.9	5.1	6.8	10.5	7.6	7.3	6.5
	II 教育(3)		12	9.1	1.7		2.4				
	III 法律・政治(3)	23.9	9	21.6	26.9	44.6	23.8	34.3	30.2	38.9	32.0
	IV 経済・社会(3)		11	14.8	6.2		8.6				
	V 文学(9)	10.2			5.7	5.5	11.6	14.0	3.6	8.7	8.7
	VI 言語(8)	2.4	18	9.1	2.7	3.8	3.6	4.3	3.6	2.5	3.3
	VII 歴史・地理(2)	15.6	14	8.6	7.2	3.5	8.1	13.9	14.9	11.3	11.7
	VIII 自然科学(4)		6	19.4	21.3	30.3	20.3	7.1	8.1	7.9	8.0
	IX 医学(4)	10.9	3	1.8	1.2		0.8				
	X 工学(5)	5.9	10		5.7	5.4	3.8	7.4	9.1	12.8	13.0
N D C	XI 芸術(7)	3.2		11.4	1.3	1.1	2.3	4.1	6.1	4.0	9.1
	XII 産業(6)	7.6	8	2.4	1.3	0.6	1.9	3.5	3.4	5.3	5.1
	XIII 全書・双書(0)						5.2				
図 書 館 学(0)		10.6	9	1.5	5.6		0.5			1.3	2.6

表2 部 局 別 利 用 比

学 部 別 利 用 比					
年度	48	49	50	51	52
教 養	24.6%	18.8%	15.6%	17.9%	18.3%
法 経	26.1	26.0	25.1	24.2	22.8
文 学	2.0	3.0	2.4	2.3	2.3
教 育	8.0	8.8	11.7	9.8	10.8
工 理	0.5	1.4	1.9	1.6	1.8
農 学	12.0	11.5	10.5	10.1	8.3
医 学	7.7	10.0	9.2	9.3	9.5
薬 学	2.1	1.8	1.7	1.3	1.5
大 学 院	0.5	0.3	0.5	0.5	0.5
職 員	0.7	0.5	1.2	0.6	0.5
特 別	8.1	9.5	10.4	11.7	11.2
其 他	4.0	3.6	3.9	3.6	3.5
計	1.8	2.0	2.2	3.0	3.0
	1.9	2.8	3.7	4.1	6.0
計	100	100	100	100	100

学 生 1 人 当 り 利 用 回 数					
年度	48	49	50	51	52
教 養	1.9%	1.6%	1.3%	1.3%	1.5%
法 経	10.8	11.1	10.7	9.2	9.3
文 学	1.5	2.3	2.3	1.8	2.2
教 育	5.1	6.0	8.3	6.5	7.3
工 理	1.8	5.1	7.0	4.9	5.5
農 学	2.2	2.3	2.2	1.8	1.5
医 学	4.1	5.6	5.6	4.8	5.0
薬 学	1.3	1.3	1.1	0.7	0.9
大 学 院	0.4	0.4	0.6	0.6	0.4
職 員	1.7	1.5	3.6	1.5	1.2
特 別	1.3	1.3	1.4	1.4	1.4

準にすれば、ほぼ大きな間違いなく大切な図書を網羅することが出来ると考えられます。

以上の様に本委員会は月々の出版物を選書していますので、各部局の購入図書より早い対応が出来ていると思います。そこで53年度より、これら購入図書リストを各部局図書室に案内する様になりました。おそらく各図書室の予算作成の御参考になるでしょう。附属図書館で積極的に図書を購入すれば、多少とも各部局図書室の費用の軽減に役立つのではないかと考えます。

2. 高額図書の選定について

最近各部局図書室では、図書費の高騰によって大学院学生の研究に必要な高額図書の購入が困難になりつつあります。この様な傾向に対応するための高額図書の選定もこの委員会の任務に入っています。なるべく共通領域の、利用度の高いものが考慮の対象になりますが、予算が限られていること、さらに継続図書となりますと予算を硬直させることのため全学的な要求をすべて満すことは非

常に困難です。しかし考えの基準としてi)人文・社会系, ii)自然科学系, iii)総記系の3系列中より重要度を検討することとし、51年度よりの継続分を含め52年度の購入図書は表3の通りであります。

人文、社会系にあつては、前記の月毎の選書分にも大学院学生にも対応する図書がある程度含まれていますが、理科系大学院学生にとっては、前述の学生用図書はほとんど意味を持ちません。従って理科系大学院学生と附属図書館との関連は、この理科系高額図書との関連が唯一のものと考えられます。

以上は52年度の本委員会の活動を報告致しましたが、現在附属図書館の改築と将来像が問題となっています。委員をはなれて理科系の大学院学生からみた図書館像を考える時、これが全学的な京都大学の図書館であるためには、上記の高額図書を通じて第2次情報センターとなり、さらにはコンピューター化による情報検索センターの役割もはたせる様整備されんことを念願しています。

表3 昭和52年度 学生用図書〔高額分〕購入一覧表

I. 継 続 分			II. 新 規 分		
分野別	書 名	金 額	書 名	金 額	
A. 総記	1. U.S.National Union Catalogue. Vol.485—539. (55vols.)	846,912 円	1. Comprehensive Dissertation Index. 1861—1872. 42vols.	920,000 円	
			2. Gesamtverzeichnis des Deutschspra- -chigen Schrifttums. 1911—1965. 38vols.	367,000	
			3. American Library Association Bulletin. V. 21—58, 60—63. 42vols.	186,358	
B. 人文 社会	1. 有価証券報告書 1977.	517,000	1. 戦旗 V 1—4	168,360	
	2. OECD刊行物 1977.	402,111	2. 日本外交記録文書(外務省蔵) 1, 2 回	826,000	
			3. Social Science Citation Index. 1977.	488,000	
C. 自然 科学	1. 赤外線スペクトルチャート 6 vols.	783,450	1. Gmelins Handbuch der Anorganis- -hen Chemie. 23vols.	1,881,797	
	2. Beilsteins Handbuch der Organisc- -hen Chemie. 12vols.	2,067,225			
	3. Science Citation Index. 1976.	1,040,000			
D. その他			1. Library Literature. 1921—1942. 4 vols.	67,267	
			2. Bibliographie der Fremdsprachigen Zeitschriftenliteratur. V. 30—36.	451,780	
			3. Bibliographie der Deutschen Zeits- -schriften Literatur. V. 108—111. 113.	449,988	
小 計		5,656,698		5,806,550	
			合 計	11,463,248	

経済学部図書室

— 特殊文庫を中心として —



経済学部図書室の歴史は官制的には大正8年の法学部からの分離・独立をもって始まるとされているが、実質的には法科大学第2図書室として、経済学全般にわたる収書を開始した明治32年にまでさかのぼるといえる。以来、本年3月末までの蔵書数は約30万冊に達する。現在の施設の概要については『静修』14巻4号の法学部図書室の紹介に詳しいので、ここでは経済学部の蔵書のなかで、とくに注目すべき特殊文庫について述べることにする。

第一次大戦の敗戦国ドイツは窮迫した生活条件のもとで、すぐれた文化財の多くを海外に売却しなければならなかった。学者の個人蔵書もこの例にもれなかった。この時期にわが国に送り込まれた著名な社会科学関係のコレクションとしては、メンガー、ゾンバルト、ビューヒャー、マイヤーの4文庫があるが、本学部はこのうち、三菱合資会社の岩崎小弥太氏の寄贈によりビューヒャー文庫が大正13年に、さらに賠償金図書という名目でマイヤー文庫が昭和6年大蔵省より移譲された。前者は11,466冊、後者は未整理のパンフレット類を加えると優に30,000冊を上廻る大文庫である。いずれも経済学を中心として、社会科学全般にわたる収書である。後者には旧蔵者の専門である統計学に関する古典的な文献、および世界各国におよぶ統計資料が豊富に集められている。このう

ち、ビューヒャー文庫は昭和45年に約50年ぶりに目録が出版された。

言論の自由を中心的テーマとし、ジャーナリズム全般にわたる広範な収書の内容とするのが、上野文庫である。元朝日新聞社主上野精一氏は、思想・言論・出版の自由に深い関心をよせて、約60年にわたって内外の文献を収集してきた。新聞経営者という実践的な立場と、ジャーナリズム史の研究者という学究的な立場からの収書は周到にして緻密という内外からの定評をえている。メイン・テーマは上述のように新聞・ジャーナリズムの歴史であるが、その歴史的背景をなす政治・経済・社会学等に関する文献が豊富に集められているのも、この文庫の大きな特色である。目録は昭和37年までに「解題目録」が3分冊の形で出版され、それ以後の寄贈分については、第2期上野文庫目録として今春すでに2冊が刊行され、今秋には第3冊目が追加刊行される予定である。以上6冊の目録に掲載されている分だけで、計23,129冊。今後さらに増えつづける京都大学最大のコレクションである。なお、本文庫には、京都大学では三冊目のインキュナビュラ（初期活字本）であるトマス・アキナスの『神学大全』（1482年）ほか数々の稀覯書が含まれている点も注目に値しよう。

財部文庫は戦前本学部で統計学を講じた財部静一教授の旧蔵書であり、和書2,776冊、洋書1,970冊である。エンゲル、ヨナーク、ケトレーなど著名な統計学者の古典的著述が多いほかに、和漢書には本草学に関するものも少なからずみられる。

河上文庫は本学部の創立50周年に際しご遺族より寄贈された故河上肇教授の旧蔵2,407冊の書籍、および原稿、ノート類約200点である。扉や見返しに時折々の感懷を記した手沢本が多いのがこの文庫の特徴の一つであらう。本文庫とは別にご遺族から昭和51年1月約300点の日記、原稿、覚書

き等の寄託を受けたので、本学部ではこれらを一括して、明春までには目録を刊行すべく準備中である。

以上述べた特殊文庫に属する図書は、学部が貴

重書として指定したものを除き、おおよそ一般図書に準じて利用することができる。ただ、マイヤー文庫は未整理本が多数のため、当分利用はできない。

—— 資 料 紹 介 ——

尊攘堂 —— 維新特別資料文庫 —— について

京都大学西門の坂を上り切った南側、その西北隅に明治の面影を残した、ささやかな平屋の洋館が建っている。入口に「京都大学原子炉実験所分室」と書かれた標札が掛けてある。この建物が戦前の尊攘堂である。最近本館で品川弥二郎書簡を入手したので、この機会に尊攘堂について、京都大学の構内に建てられたいきさつを含めて、その沿革をしばらく回顧してみたい。ややもすると忘れられがちな此堂のことを歴史の一コマとして記憶にとどめていただければ幸いである。

話は幕末にさかのぼる。吉田松陰は早くから京都に尊攘堂を建てて勤王の志士を祀り国民の志気を鼓舞したいという大志を抱いていた。しかし彼は安政の大獄に刑死して彼の企望は空しく水泡に帰した。その刑死に先だつ一週間前、彼は江戸伝馬町の獄中より門下の入江子遠に書簡を送り尊攘堂建設の後事を託したが、子遠もまた元治元年の戦に敗死して書簡は子遠の手にとどかなかった。品川弥二郎は所在不明のまま二十余年間埋没していたこの松陰の書簡を偶然、水戸で入手した。彼はこれを読んで松陰の憂国の至誠に感動し、独立で先師松陰の悲願を実現させんと固く心に誓った。彼は明治三十年京都市高倉通錦小路に尊攘堂を創設して松陰の宿志を継承し、先師の遺訓に応えた。品川は苦心経営の末に竣工させたこの尊攘堂の中に幕末維新の殉難志士の英霊を祀り、また彼等の事蹟に関する史料、遺墨、遺品を極力蒐集してこれを堂内に収納して丁重に保管した。更に彼は毎年志士の慰霊祭を荘厳に営み同時に堂内に彼等の遺墨遺品を展示して参拝者の従覧に供した。これは一つに先賢志士に対する追慕の誠を尽



し、また一つにはこれによって国民精神の高揚を促すためであった。彼は毎年この祭典と展観を数十年の長期に亘って励行した。

彼の松陰と物故志士に対する崇敬と追善の熱情を風聞した国内の有志は殉難志士の言行を語る記念の遺品遺墨を相次いで彼に贈呈した。志士のこうした記念品は品川自身の手で集められたものももとより多いが有志の寄贈も夥しく、彼の生前すでに千数百点の多数に達していた。彼はこれ等の貴重な記念品を一家の私有とすることを潔しとせず、またその焼失、損亡等の不慮の災害を恐れて彼が選定した尊攘堂保存委員と、堂とその所蔵品の永久保存の方法を合同協議した。しかし彼は其の方策の結論が下される前に病魔に犯され明治三十三年二月十六日京都で奔放不軌の政治家として波瀾の生涯を閉じた。享年五十八才であった。

品川の死後、保存委員松本鼎等は品川の嗣子弥一等と計って京都帝国大学の構内に尊攘堂を新築し、かつ錦小路の尊攘堂の所蔵品を全部、同大学に寄附することを決議した。明治三十三年十月、其の旨を文部大臣に要請して同三十四年二月許可

された。吉田松陰は京都に尊攘堂を創設して志士の英霊を弔祭することも勿論、彼の熱心に唱導するところであったが、その究極の目的はむしろこの地に大学を設立して天下の俊英を集め、国家有用の偉材を育成することにあった。このことは安政六年十月二十八日入江子遠宛の彼の書簡に明瞭に言及されている。東京大学に拮抗して自由清新の学風を標榜する今日の京都大学の興隆と盛大を泉下の松陰の英魂は如何なる感慨を以て凝視していることだろう。明治三十年六月京都にも待望の京都帝国大学が遂に創設された。明治三十六年四月尊攘堂の新築が1ケ年の歳月をかけて前記の場所に竣工した。旧堂の所蔵品は一時ここに搬入されたが所蔵品のより安全な保存を考慮して附属図書館書庫に移搬された。ここに始めて松陰の悲願も達成され、また品川の年来の宿望も漸く実現することができた。尊攘堂委員は明治三十四年六月以后毎年十月二十七日の松陰忌、二月十六日の品川忌に尊攘堂を借受け両先賢と志士の慰霊祭を営むこと、同時に堂の所蔵品を展覧して公衆の閲覧に資することを京都帝国大学に申請して受入れられた。更に大正十年三月以降は従来の毎年二回の祭典を秋期（十月二十七日松陰忌）一回の小祭、三年目に一回の大祭を行うことに改めた。

附属図書館は尊攘堂の保管、所蔵品の整理、寄贈（図書及び物品）の受入、その他、堂及び物品の利用、運営等一切の事務を担当した。また毎年の祭典を執行し堂の所蔵品を展示して一般公衆の参観に供した。附属図書館は遺墨、遺品を祭典の際に展覧するだけでなく積極的に篤士家の要求に応じてその研究の資料として提供し、或は公私立教育団体の展覧会に出品する等、機会ある毎に松陰、品川両先賢の遺志の継承につとめた。終戦以后、国民の大多数は勿論、京大内でさえ尊攘堂が存在していたことを知る者は多くない。例えば知っ

ていても殆どの者は関心を持たないだろう。尊攘堂そのものの存否はともかく、その所蔵する遺墨遺品は幕末維新の志士がこの世に残した涙痕の証言である。彼等によって近代日本の基礎は築かれた。まことに彼等の遺墨、遺品は黎明日本の開眼を報ずる警世の曉鐘であり、幕府の崩壊を弔する悲傷の挽歌である。

戦後は既に終わったといわれる今日、歴史の現実には客観的に評価されてよいであろう。現在、幕末維新史研究の業績は夥しく発表されつつあるが、まだ未墾の研究分野も少なからず残されていることだろう。もしこの分野に解明の鋏を振わんとする研究者があれば尊攘堂の所蔵品は必ず有力な資料を提示することだろう。戦前、尊攘堂と称せられた図書の一群、並びに尊攘堂の所蔵品はすべて現在「維新特別資料文庫」の中に収納されて其の根幹となっている。尊攘堂とその所蔵品は終戦当時の混乱にも拘らず幸に被害を蒙ることなく、所蔵品は特別文庫の名称で附属図書館貴重書庫内に保管されている。志士の遺品、遺墨は点数も多く内容も多種多様で、ここに其の一々を挙げることは出来ない。その品目の詳細は尊攘堂遺墨集、尊攘堂遺芳、尊攘堂聚英等の解説に譲って、ここには上記の諸書中より著名の二、三を次に抽出して一斑を挙げ、その全貌を窺うことに止める。吉田松陰筆書簡（佐久間象山。横井小楠宛）。品川弥二郎筆 吉田松陰訓。西郷隆盛筆 書簡（品川弥二郎宛）。大久保利通筆 薩長芸盟約書。木戸孝允筆 函嶺之詩。高杉晋作筆 弔吉田松陰詩。坂本龍馬筆 書簡（頼三樹宛）。佐久間象山筆 題那波利翁像詩。高山彦九郎筆 在京日記。入江九一筆 吉田松陰詩。松下村塾一燈銭申合帳。地震計 佐久間象山考案。紙捻詠歌 平野国民獄中の製作。奇兵隊日記。（鈴鹿蔵-附属図書館元職員）

—— 図書館界の動き ——

第25回国立大学図書館協議会総会

さる6月14～16日、筑波大学を会場館として標記総会が開催された。第1日は午後開会式、第2

日は全体会議、第3日は分科会と全体会議が行われたが、主な事項について以下に摘記する。

まず報告事項として、各調査研究班「図書館機械化」（継続）、「大学図書館改善」（終了）、「図書館相互協力」（継続）の報告と「大学図書館基本問題 特別委員会」（終了）の報告があった。研究集会は「大学図書館の相互協力とネットワーク」をテーマとして講演と討議が行われた。

第3日の分科会は3部に分れて討議が持たれ、午後にその取りまとめをして、今回の総会は終了した。会場となった筑波研究学園都市内に、主要施設の新しい建物が点在する地域の広大さと自然環境の快適さは参加者に新鮮な強い印象を与えた。

なお各分科会から出された要望事項は7月12日の常務理事会でまとめられ、7月28日付で文部大臣はじめ関係方面へ要望書として提出された。

この内容は次のとおりである。

A かねてより関係当局の努力によりその実施面において相当の成果があがっているが、さらに

特段の配慮を要望する事項として、1 予算について図書館維持費、夜間開館・休日開館に必要な経費、外国雑誌購入費、参考図書購入費、学生用図書購入費、特別図書購入費の増額。2 職員について参考業務担当職員の増員。

B 以前よりたびたび要望してはいるが、まだ実施されていないので格別の配慮を要望する事項として、1 冷房設備の設置とその維持費。2 図書館職員について相互協力業務担当職員等の6項目（前年度通り）。

C 本年度上記総会において新たな問題としてとりあげられたので、是非配慮を願いたい事項として、身障学生に対する図書館サービスを充実させるために必要な職員の増員。

D 特別要望事項として、大学図書館関係諸基準の改訂、とくに施設基準の抜本的改訂をはかるとともに、それらを裏づける措置をとること。

日本図書館研究会・図書館学セミナー

——図書館の仕事の原点としての「選択」を考える——

上記セミナーが、さる7月14・15日の2日間、比叡山「延暦寺会館」で開催された。今回のセミナーは、「図書館学および図書館学の専門的業務のなかで中核的と考えられながら、理論化が困難で経験的に扱われている『選択、の問題』」に焦点をあて、「選択の現況、日常的に直面している問題をふまえた上で選択理論に学び、それを図書館業務のなかに具体化していく基本的な方向づけとしての収集方針の作成という問題を検討する」主旨で開かれたものである。78名（大学40名、公共31名）の参加者があり、定員をオーバーするほどで「選択」についての関心の強さが感じられた。

第1日は、酒井忠志氏（京都府大）、西田博志氏（大阪府立図）から、大学と公共図書館における図書選択の現状が、日常業務のなかで片手間として扱われていること、図書館員より利用者が文献に精通していること、蔵書構成・読書の自由の確立のためにも選択基準の確立と選択業務の確立の必要性が強調された。夜には、大学と公共に分

かれて図書選択の実状報告をもとに経験交流を行った。第2日午前、河井弘志氏（日体大）より「図書選択理論の発展—実務学から科学へ—」と題して、図書選択論史の考察、古典的図書選択論や良書論などの実務学について論じ、さらに、要求・読書興味調査・書評・蔵書評価など文献を紹介しながら、選択の実務学から科学（理論化）への流れを詳細にわたって解説された。まとめとして、館員の選択に対する関心の必要性を強調された。最後に（第2日午後）大学と公共に分かれて「収集方針の意義と作成」をテーマに大学図書館では、三上正礼氏（大阪経済大図）から成文化されている収集方針の事例報告をもとに討議を行った。選択者は利用者か館員か、は意見の分かれるところであるが、選択権の問題は別にしても収集方針の早急な成文化とその公開が必要であることを認めあうなど、熱心な討論を行ない、盛会であった。

京都大学前金払外国雑誌目録(1978年度)

学術雑誌の出版は年々増加の一途をたどり、特に外国雑誌は購入価格も上昇する傾向にあり、必要なものを全て各部局毎に購入することは不可能となり、各部局図書室は毎年契約更新期になるとその選書に苦慮しているのが現状であり、他部局で購入されている外国雑誌をお互いに共同利用することがますます重要になってきた。

附属図書館では従来、「京都大学和文雑誌総合目録」、「京都大学欧文雑誌総合目録」等を刊行してきたが、これらの編集は多大の労力と費用がかかるために、その改訂の時機も遅れがちであり、年々変化する各部局の外国雑誌購入状況を知

ることは非常に困難であった。しかし、昭和51年から附属図書館に「外国雑誌機械処理班」を置き、全学の前金払外国雑誌の契約に伴う作業を大型計算機センターの電算機を使用して処理してきており、その作業の一環として、目録を作成することを企画し、このほど始めて昭和53年度分の「前金払外国雑誌目録」を刊行したのである。

この雑誌目録はすでに各部局・教室図書室に配布されており、学内の外国雑誌の共同利用の道具として、また、各部局の外国雑誌選書の一助として役立てていただけるものと期待している。

— 人 事 異 動 —

昭和53.4.1～7.16

○採用

昭和53年5月1日付 事務補佐員 吉川 雅子(附属図書館閲覧課閲覧貸付掛)

○配置換

昭和53年4月1日付 附属図書館事務部長 鈴木 正武(山口大学附属図書館事務部長から)

茨城大学庶務部長 須ノ内英夫(附属図書館事務部長から)

整理課受入掛長 近藤禧禊男(医学部整理掛長から)

閲覧課閲覧貸付掛長 島田 広二(法学部整理掛長から)

法学部整理掛長 武内 隆恭(附属図書館整理課受入掛長から)

〃 閲覧掛長 平井 達(〃 閲覧課閲覧貸付掛長から)

工学部経理課第二経理掛長 中嶋 勇(〃 総務課経理掛長から)

昭和53年6月1日付 事務官 近藤 治子 教養部整理掛(附属図書館整理課洋書目録掛から)

〃 井狩らく子 附属図書館整理課洋書目録掛(教養部整理掛から)

昭和53年6月16日付 事務官 篠原 俊夫 文学部整理掛(附属図書館閲覧課閲覧貸付掛から)

昭和53年7月16日付 事務官 橋本 展世 数理解析研究所図書掛(附属図書館整理課和漢書目録掛から)

〃 山田 信子 附属図書館整理課和漢書目録掛(数理解析研究所図書掛から)

○転任

昭和53年4月1日付 附属図書館総務課経理掛長 中嶋 一郎(滋賀医科大学会計課出納掛長から)

○辞職

昭和53年4月1日付 事務官 林 豊次郎(附属図書館閲覧課閲覧貸付掛)

昭和53年4月5日付 事務補佐員 山田 員子(附属図書館閲覧課閲覧貸付掛)

京都大学附属図書館報「静脩」 Vol. 15, No. 3 (通号61号) 1978年8月31日発行・編集: 静脩編集委員会(責任者 附属図書館事務部長) 発行: 京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電大代 751-2111 (内線) 2611~2641